学園報 皇學館 第30号

発行・編集
学校法人皇學館（総務課）　TEL0596・22・6308
伊勢学舎［法人本部・大学院・専攻科・文学部・教育学部・現代日本社会学部］
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704番地
TEL0596・22・0201㈹　FAX0596・27・1704
名張学舎［大学院・社会福祉学部］
〒518-0498 三重県名張市春日丘７番町１番地
TEL0595・61・3351㈹　FAX0595・61・3350
高等学校・中学校　三重県伊勢市楠部町138
【高校】〒516-8577　TEL0596・22・0205㈹
【中学】〒516-8588　TEL0596・23・1398㈹

●今号の注目記事

1面
藤原正彦氏が講演
2面
「建国記念の日の意義」伴五十嗣郎学長講義
「立志塾」田尾憲男氏講演会
3面
大学女子バレー躍進
4・5面　伊勢統合特集
名張学舎13年のあゆみ
ありがとう名張
6面　高校・中学
春高バレー全国大会出場
8面
第3回 皇－1グランプリ
教育学科４年 永富彩香さんが優勝

●連載

2面
皇學館人物列伝⑪ 千田 憲
3面
リレーエッセイ　私の学生時代
荊木美行（史料編纂所教授）
7面
先輩、お元気ですか
青山隆生氏（国文学科第4期・昭和44年卒）

皇學館大学 教育講演会

「日本のこれから」を語る

講師●藤原正彦氏（お茶の水女子大学名誉教授・数学者・作家）

〝祖国への誇り〟を取り戻そう

去る十二月四日、四日市市総合会館において藤原正彦氏の講演会を開催した。氏はベストセラー『国家の品格』の著者であり、お茶の水女子大学名誉教授。「日本のこれから」と題した講演には県内外から約四百名が訪れた。

当日は半田美永学生部長による司会進行のもと、伴五十嗣郎学長の挨拶に続いて講演が始まった。

冒頭から藤原氏は格差社会や労働問題、外交問題など現代の日本社会を取り巻くさまざまな課題について考察した。すべての病根は私たち国民一人一人が祖国への誇りを失ったことにあると語り、問題を解決するには日本人が本来持っていた座標軸に立ちかえる必要があると力説した。そして、誇りを取り戻すには長年にわたり日本人の道徳観の中核を成してきた「武士道精神」を見直すべきと指摘。武士道はもともと鎌倉武士の〝戦いの掟〟だったが、江戸時代に精神的倫理へと熟成され日本人全体の行動規範となった。かつてヨーロッパ貴族が権力・教養・富をもって人々から尊敬されたのに対し、武士は武士道精神という美徳を最も忠実に実践している点で庶民に尊敬された。このように、金銭よりも美徳を重んじるのは他に例をみない日本人の精神性の高さの表れと示唆した。

また、現在にいたる国家崩壊を決定的にした原因は、敗戦後のGHQによる政策、ウォーギルトインフォメーションプログラム（戦争についての罪悪感を日本人の心に植え付けるための宣伝計画）などにあると言及。戦勝国が日本対アメリカという戦争の構図を、日本の軍国主義者対善良な国民という構図にわい曲させ、日本人に自国の歴史や祖国愛を否定させることにより国家を自己崩壊させるというシステムを構築したと伝えた。

最後に、今、最も必要なのは国民が日本人としての自尊心を持ち、日本特有の美徳を取り戻すことだと熱弁。競争より和、個よりも公、自己主張より〝察する〟ことに重きを置く日本人の美徳を見直すことが重要だと語った。その上で、国家が苦境である時期こそ最も実り多い時代といい、この危機をバネにさらなる高みに向かおうと締めくくった。

優しい語り口調だが、内容は厳しく、政治から教育まで幅広く語った藤原氏。講演会終了後には、聴講者からのサインの要望に気軽に応えた。

会場は補助席もすべて埋まるほどの盛況ぶりだった。

県内外から約四百名が聴講

ベストセラー作家の講演とあって、会場はたくさんの聴講者であふれ、補助席が用意されるほどだった。滋賀県から訪れた山川晋さんは「日本人の誇りを失っているのは政治家だと思っていたが、国民一人一人であることを知り、反省した。皇學館のような学校が活躍して、日本の底力となってほしい」と語った。また親子で訪れた太田千尋さんは「メディアや歴史の先生が伝えないことを言ってくださった。私たちのこれからの志すべき道が見えた」と語った。

親子で訪れた太田千尋さん（左）。

名張学舎での13年間を振り返る

社会福祉学部「ホームカミングデー」を開催

松本基子元教授の講演会も

名張の里山が紅葉に包まれた昨年十一月二十七日、名張学舎で社会福祉学部「ホームカミングデー」を開催した。この催しは、平成二十三年度に名張学舎が伊勢学舎に統合されることに伴い企画されたもので、同学部の卒業生や在校生、教職員ら三百名以上が集まった。

当日、午後一時二十分から元教授の松本基子先生による講演会やミニシンポジウムが開かれた。その中のパネルディスカッションでは教授らが学部創設時のエピソードや学部への想いを語った。途中、会場から「移転後、大学と地域の人々とのつながりはどうなるのか」などの声が聞かれる場面もあり、活発に意見交換がなされる中で参加者全員が同学部の存在や今後を真剣に考えている様子がみられた。

夕方からは自由懇談となり、県内外から訪れた卒業生らが恩師や旧友との再会を楽しんだ。

名張市から参加した卒業生九期の宮越敬子さんは現在、伊賀市社会福祉協議会でニートや引きこもりの支援を担当していると話し、「大学時代に本当の意味での福祉を学ぶことができて良かった」と学生生活を振り返った。「名張はかけがえのない友人に出会えた大切な場所」とは五期生の岡野佳子さん。一期生の柏木秀紀さんは現在大阪府豊中市の病院でソーシャルワーカーをしていると語り、卒業生らが名張での学びを生かし全国各地で活躍していることがうかがえた。

名張学舎の歩みなどについては四・五面で詳しく取り上げる。

盛り上がったパネルディスカッションのようす。

春秋　倉田山

今年も出寮式の季節を迎えた。本学では、基本的には、遠方の1、2年生の一部が寮生活をする。先輩の出寮したあとを、後輩が任される。卒業式とともに、出寮式もまた、感慨一入（ひとしお）である▼青春の一時期「同じかまの飯を食う」という体験が、後年に与える影響には甚大なものがあるだろう。ポオル・ヴェルレエンの詩を捧げよう。「君、過ぎし日に何をかなせし。／君今ここに唯だ嘆く。／／語れや、君、そもそもわかき折なにをかなせし」（永井荷風訳）。『懺悔録』などの作品をもつ、フランス象徴派の詩人の作品を引用したのは、これからの人生の行程を、決して急ぐことなく着実に歩んでもらいたいからだ▼伊勢神宮62回式年遷宮とともに皇學館大学130周年の記念の年が近づく。大御神の御加護に思いを致すことは、蘇生の力を察知することでもあるだろう。悠久の時空を生かされて、私たち人間も、20年に一度の禊を実践せねばなるまい。感謝の気持ちは、形に表してこそ、力となる筈である▼もっとゆっくりと、そして大きく飛翔しよう。天空はひろく、大地は果てしなく続く。倉田山は、その起点である。

伴学長 年頭講話（名張）・必修科目「伊勢学」（伊勢）

「建国記念の日の意義」

一月十二日に名張学舎（年頭講話）で、同二十八日には伊勢学舎（必修科目「伊勢学」）で、伴五十嗣郎学長による「建国記念の日の意義」と題した講義が行われた。以下、抜粋して内容を掲載する。

２月11日が「建国記念の日」にふさわしい日であるとし、その意義を強く訴える伴学長。

毎年二月十一日は「建国記念の日」であります。この日が国民の祝日に加えられたのは、昭和四十一年のことでした。法案を提出したのは当時の与党・自由民主党で、制定までには野党の強い反対がありました。その反対理由の大きな一つが、〈二月十一日〉の由来として『日本書紀』が伝える初代神武天皇の御即位の記述「辛酉年の春正月の庚辰の朔（ついたち）に、天皇、橿原宮に即帝位す。是歳を天皇元年とし、正妃を尊びて皇后としたまふ」が歴史的事実とは言えないというものでした。

この記録が歴史的事実と言えるかどうか。結論から申しますと、この年月日付は歴史的事実の日とは言えない、というよりも、今となっては正確に実証のできない問題なのであります。

とは言え、初代天皇が実在したかどうかなどということを議論すること自体が、実は全くのナンセンスであります。今、日本には厳然として第一二五代目の天皇陛下がおられます。二五代といえば、あるいは誤りがあるかもしれませんが、現に代々即位されてきた天皇がおられるからには、必ず始祖というべき、第一代目の方が存在するのです。その実在を疑うなどということは、それこそ非科学的議論であると言わねばなりません。

そして、日本の歴史を振り返ってみると、いつの時代にも第一代神武天皇の御業績を讃え、そこに日本の原点を求めた主張がなされております。幕末の英傑、橋本景岳（左内）先生は、上司に宛てた書状の中で、神武天皇が日本の国のあるべき姿・進むべき方向を定め子孫たちに御示しになったと認識し、日本という国の原点は神武天皇にあると主張しておられます。

私共も、今日なお続く様々な反対意見に少しも惑わされることなく、自分の国の歴史を正しくしっかりと学んで、歴史的事実よりさらに重要な意義を持つ歴史的真実とでも言うべきもの、千年以上もの長い伝統をもって日本人の根本の思想を支えてきた所のものをつかみ取り、確信しなければなりません。

二月十一日は、日本人としての自覚を堅持し、家の玄関に日の丸を掲げ、家族と共に、この国の誕生を偲び、御祝いして欲しいと心から思うのであります。

六四〇名が新成人に

伊勢・名張両学舎で学内成人式を挙行

一月十二日に名張学舎で、同十三日には伊勢学舎で、それぞれ学内成人式が挙行された。

式辞では伴五十嗣郎学長が「神道の独自性」をテーマに、参拝の際に柏手を打つ習俗などを例に挙げて、日本人が独自性に富む「型（形）」を大切にする民族であること、また、日の神「天照大御神」を最高神かつ女性神として崇めることなど、他には見られぬ固有の考え方を有していることを述べ、成人を機会に日本人としての自覚を確立する必要を強く訴えた。

伴学長より記念品であるネームペンを受け取る大藪さん。

名張学舎では、社会福祉学科二年生の大藪綾華さんが新成人代表として、「成人になるまで支えてくださった多くの方々に感謝の気持ちを表したい」と謝辞を述べた。

「新たな環境（伊勢）でも頑張ります」と大藪さん。

閉式後、大藪さんは、「今までは自分の行動や発言について深く考えてこなかったが、二十歳になったことで自分の言動について、明確な責任を持ちたい。新しい環境（伊勢学舎）に移るが、様々なことにチャレンジしてみたい」と抱負を語り、大人としての自覚を新たにしていた。

現代日本社会学部

「立志塾」開催のご報告

本学客員教授 田尾憲男氏講演会

本学では各界でご活躍の方や客員教授等の方々を講師に迎え、本学の教学、また産官学・住の一体的振興を図る地域貢献を目的に「特別講座」を開講している。

昨年八月六日、伊勢学舎において「日本人の生き様を考える」と題し第二回講座が開かれた。講師は本学客員教授で憲法・皇室法研究家・鉄道情報システム株式会社常勤監査役の田尾憲男（おのりお）先生。田尾先生は英国留学や著書『日本を語る』のご執筆、明治神宮武道場至誠館での合気道師範としてのご経験をふまえ、国家・国民として守るべき主権や文化、歴史、そして精神を、学生一人ひとりの心へ熱く語っていただいた。

日本の歴史や文化について熱弁を振るう田尾先生。

受講した学生たちは熱心に講義を拝聴。昼食を交え、後半は活発な意見交換をし、この国を支えてゆく者としての自覚を新たにしていた。

受講生からは「講義を伺って今の大学生活をもう一度見直し、意義あるものとしたいと感じた」「日本人として誇りを持つために歴史・文化についてもっと知ることが大切」「日本の文化を世界に発信できるように学んでゆきたい」「神道精神・武士道精神を実践したい」「皇學館の使命を教えていただいた」などの感想が寄せられた。

次回は、二月十三日（日）に再び田尾先生をお招きしての開催を予定している。

講座終了後に聴講者と記念撮影。２月には、「日本人としての家族・郷土・国家を考える」の講座が予定されている。

皇學館人物列伝 11

千田憲

せんだ けん

四十一年間にわたり皇學館教育に身骨を砕く

せんだ けん◆明治二十二年徳島県生れ。第五高等学校、東京帝国大学文学部卒業、同大学院修了。通算四十一年間にわたり皇學館教育に身骨を砕いた。湯浅廉孫らとともに神宮文庫目録を作成。京都女子大学、天理大学などでも教授を歴任。編著書に『校本万葉集』（校本万葉集刊行会）、『祝詞・寿詞』（岩波文庫）。一八八九～一九七四。

『校本萬葉集』という書物がある。上代文学を志すものが第一に就いて学ぶ書である。この『校本萬葉集』の編纂が始まったのは明治四十五年（一九一二）年七月十日。十一日には東京帝国大学の卒業式に明治天皇の行幸があり、その際、元暦校本萬葉集や藍紙本萬葉集などについて芳賀矢一・佐佐木信綱による解説が行われたことを記念してのことである。

千田憲は卒業生として、高木市之助、小林好日らとともにこの卒業式に出席した。引き続き大学院へ進学し、その間、佐佐木信綱・橋本進吉とともに『校本萬葉集』の編纂に従事。殊に元暦校本萬葉集の校合については、当時の所蔵者である古河虎之助の邸へ半年間毎日通った。はじめのうち、古河家は千田の前で金庫からの出入庫時に厳格な紙数確認をしたが、信用ができたのかしばらくしてその「儀式」はなくなったという。当時、『校本萬葉集』の編纂事業予算は年間千円であったところ、元暦校本を古河虎之助が購入した金額は五万円であったというから厳重に管理していたわけである。

千田憲が上田萬年の周旋を得て神宮皇學館へ赴任したのは、大正六年（一九一七）九月、少壮二十九歳の教授であった。神宮文庫主幹などを兼任し、昭和二十一年（一九四六）三月の廃学までの二十九年間を伊勢で過ごした。また、再興後も亡くなるまで皇學館大学で教鞭をとった。

戦前の教え子には中世社会経済史の小島鉦作、伊藤整に影響を与えた歌人の北見恂吉、祝詞研究の青木紀元、『やちまた』の足立巻一らがおり、中途退学したが海音寺潮五郎も目をかけた教え子である。とりわけ、学生たちの短歌同人「五更（ごこう）」の指導では、濃厚な師弟関係を築いた。昭和四十四年八月に大神神社神苑に八十の賀を祝して千田の揮毫により額田王「下近江国時作歌」の碑が建てられた際にも、その建設費に対する賛同者のほとんどが新旧皇學館の卒業生であった。今も「皇學館大學教授 千田憲」の名が山辺道を往来する人々の目に留まっている。短歌、瞬き、酒、三行半の葉書など逸話に事欠かず、寡黙ながら学生に与えた影響は大きかった。

松風の声澄みわたる学びやの
み国学びのたのしくもあるか

奇しくも昭和四十九年十二月二十三日、肝胆相照らす仲であった高木市之助と同日に帰幽。旧蔵書の一部が本学国文学科研究室に蔵されている。

（文学部准教授　齋藤　平）

新旧キャプテンインタビュー

大学女子バレーボール 2部リーグに昇格!

東海学連

本学排球(バレーボール)部女子が昨春に開催された東海三部リーグ戦で優勝。入れ替え戦で岐阜経済大学を破り、みごと二部リーグ昇格を果たした。昇格後に行われた秋の二部リーグ戦では八チームのうち六位と奮闘。その躍進の理由について、昨年十二月までチームを率いてきた東亜美さん(教育学科三年)、新キャプテンとなった菱田菜緒さん(同学科二年)の二人に伺った。

昨年末に開催の「全日本インカレ2010」では、グループ戦を突破、決勝トーナメントに進出した。写真は、試合後のリラックスした様子。

――二部リーグに昇格した要因は何だと思われますか。

東◆一昨年の秋、わたしがキャプテンになってまず取り組んだのはチームの意識改革。三部に甘んじるのではなく、二部、一部と上のリーグをめざしたいという思いをメンバーに訴えました。

菱田◆その時一年生だった私たちをはじめチーム全員が同じ思いだったので、迷わず東さんについていきました。みんなで目標を共有できたことが強さにつながったと思います。

――意識が変わってからチーム内に変化は?

東◆自覚が芽生えてから自然と練習方法も変わりました。二カ月間、ひたすら走りこんで体力をつけたり自己流だったフォームを見直したり……。基礎基本を徹底したことでチーム力の底上げを図ることができました。

菱田◆〝考えるバレー〟になったと思います。常に試合を意識して、レシーブにしても単に拾うのではなく、先の先まで考えてプレーするようになりました。

――チームの強み、特色についてお聞かせください。

東◆いい意味で〝子ども〟のチーム。一点取ったら喜びを爆発させ、一生懸命やることを恥ずかしく思わない。その熱さが強みだと思います。

菱田◆レギュラー、控えの区別なく気持ちが一つにまとまっているところ。ベンチからの声掛けなど、他校の生徒が驚くほどのテンションの高さです(笑)。

――キャプテン、メンバーとして苦労した点をそれぞれ教えてください。

東◆先輩方が抜けると一からチームづくりをしなければいけないので、意識の高い部員を育てることに苦労しました。もどかしさから時には感情まかせに厳しい言葉を浴びせたこともあります。わかってはいても、嫌われ役になるのはつらかったですね。

菱田◆ある日、東さんが「わたしが辞めれば、チームは一つにまとまるのかな」と弱気な発言をしたことがあったんです。誰よりもバレーボールを愛している東さんをそこまで追い込んでしまったことが情けなくて…。その時、東さん一人が頑張るのではなく、そばで一緒に盛り上げていこうと決意を新たにしました。

――新チームに望むことは。

東◆支えてくださっている周りの方への感謝の気持ちを忘れないでほしいですね。勝ち負けの前に、人間として大切なことだと思います。

菱田◆「全員がキャプテン」と言えるチームにしたいですね。自分のことだけでなく、一人ひとりが常に全体のことを考え一致団結して取り組んでいける。そんなチームづくりをめざしていきたいです。

握手する二人(右が東さん)。

第8回 現代日本塾

体験的リーダー論を語る

講師◆JR東海会長　**葛西敬之氏**

昨年十二月十七日、本学客員教授でJR東海会長の葛西敬之氏を講師に迎え、第八回「現代日本塾」が開催された。国鉄分割民営化を成し遂げ、現在も超電導リニアによる中央新幹線の建設、高速鉄道の海外展開等に取り組む葛西氏は、経験に基づいたリーダー論を展開。実体験から語られる重みある言葉に、学生は惹き込まれていた。

講演の中で葛西氏は、リーダーシップの三要素として①方針・目標の決定、②企画・立案、③統率・実行を挙げた。そして「リーダーには、人や自然と交流した原体験に基づく人間力が必要」と説いた。

講演後の質疑では、時勢を反映してか就職や仕事に関する質問が相次いだ。「仕事を決める際に考えるべきことは何か」との問いに氏は、「すべては縁。『これだけは嫌だ』という仕事には就かない方がよい。長期的、安定的に取り組める仕事ならば、取り組むうちに天職になっていく」と示唆に富む回答をした。

現代日本社会学科一年生の小田智香さんは「〝人との付き合いが大事〟という部分が印象に残った。大学生活で出会うたくさんの人から学べることを学び、大きな人間になりたい」と感想を話していた。同浜口俊介君は「挫折を味わうだけでなく、それを乗り越えることが大切という話が心に響いた。今後、失敗を経験しても乗り越えることで自信につなげたい」と話していた。

河南師範大学で半田美永教授が記念講義

熱気のなかで迎えられる

日本文学について講義する半田教授。「中国へ来ると、あらゆるものからパワーをもらいます」とも。

昨年十二月二十日および二十一日の両日、協定校である河南師範大学(中国・新郷市)において、半田美永文学部国文学科教授が「文学に見る日本近代の黎明期」と題して、記念講義を行った。これは、平成二十二年六月に本学との間で締結した学術交流協定を記念してのもので、交流プロジェクトの幕開けとして河南師範大学が企画した。

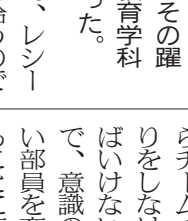
半田教授は、主に森鷗外・坪内逍遙・正岡子規について、二年生を中心とする日本語学科生とその大学院生、スタッフ約三百名を相手に二日間にわたる熱弁を振るった。聴講した学生からは後日、多くの感想文が半田教授の元に寄せられた。また、教員の孫士超さんは、「日本の研究者が実際に教壇に立つことは、我々の講義より何倍もの説得力がある。学生たちの眼の輝きが普段と違った」と振り返った。

講義を終えた半田教授は、「中国の学生の修学意欲は、すごい。魂を込めないと対峙できないほどの熱心さで、講義しやすい環境だ。今後もこのような機会が活発になり、両校の絆がより深まることを期待したい」と話した。なお、半田教授には講義終了後、これまでの功績に対して、河南師範大学から客員教授の称号が授与された。

外国語学院の正面玄関には、成功を祝した横断幕も。

リレーエッセイ　私の学生時代

よく遊び、よく学び



皇學館大学史料編纂所 教授　**荊木美行**
筑波大学大学院修了

学生時代の思い出といっても、思い出すのは恥ずかしいことばかり。自慢できるようなことはなに一つない。学部は高知大学の人文学部。ここで四年間過ごした。最近、村木厚子先輩のことをあちこちで聞かれるが、キャンパスでお目にかかった記憶はない。

和歌山生まれのぼくには、高知は遠い存在だった。後年、しばし ば進学の動機を訊ねられたが、高三の十二月から受験勉強を始めて合格できる一期校なんて数えるほどしかなかった。それに、高校のころはずいぶんイジメられたので、大学は、同級生の敬遠する遠隔地と決めていた。

知らない土地で一からの生活、それも一人暮らしはたいへんだったが、高知の四年間は愉快だった。空はどこまでも碧く、当時人気のあった青柳裕介さんの『土佐の一本釣り』のイメージそのもの。でも、そのころの高知は、想像を絶する田舎(笑)。テレビなんか二局しか映らないし、『少年マガジン』も書店に並ぶのは土曜日の午後。朝刊に前夜のナイターの得点経過が途中までしか載らないのには唖然とした(夕刊のない地域があることも、はじめて知った!)。それでも、万事快適。大学生が少ないから、街のひとは大切にしてくださるし、級友はみんな親切だから、もういじめられることもなかった。

学生だから酒も飲んだし、よく遊んだが、勉強も楽しかった。当時の史学専攻には、秋澤繁・金子修一・玉井力・福地惇といった錚々たるスタッフが揃っていたし、山本大先生や伊野部重一郎先生も出講しておられた。山本先生は、石母田正氏や家永三郎氏と東大国史の同期。お二人のことは、いつも話題にのぼった。学史に興味をもつようになったのも、先生の談話の影響である。だが、なんといっても、鮮烈だったのは玉井先生と金子先生の講義。大学院進学を考えたのも、両先生に負うところが大きい。それで、四回生になったとき……。えっ、もう字数ないの? では、大学院受験の話は、またいつか。

地域との交流に大きく貢献

松 鹿 昭 二さん

名張市教育委員長

皇學館大学は名張市との連携に尽力され、教育や福祉の面だけでなく、地域との交流にも大きく貢献されました。「隠〈なばり〉街道市」のときのこと。私は皇大生が活動する榊町集議所で「名張の昔話」の紙芝居を見ようと中に入ると、私一人でしたが笑顔で「よくいらっしゃいました」と、2 人の女子学生が「頓子地蔵」等を紹介してくれました。男子学生が運んできた郷土料理「のっぺ汁」も実に美味しかったです。出身が滋賀県と四日市という女子学生 2 人に「名張市のどこが好きか」と尋ねたところ、「名張の住民は人情厚く楽しく交流できます。昔の町並に川が流れ、歴史と文化が薫る不思議で魅力的なまち。だから好きです」。思わず感動を覚えた次第です。

地域社会に福祉文化を構築

西 岡 時 彦さん

国文 5 期●伊賀市社会事業協会理事長

名張学舎13年の歳月の中で、地域社会に福祉文化を構築し、「理念」実現のために全学を挙げて取り組まれたことはまことに貴重でありました。広く「福祉」を学んだ館友2000名余りが輩出されました。私共の法人にも就職され、保育園や老人・障害者の福祉現場で、日夜「幸せ作り」の仕事に当たっていただき、有り難く存じています。また、月例文化講座は初回から出来る限り受講いたしました。先生方が専門研究を分かり易く語りかけていただいたことを感謝しています。今後は、名張での実績を地域とのつながりや未来を拓く学問の充実発展のために活かされますよう切にお願い申し上げます。

名張は正史に表れる要衝の地

奥 田 正 昭さん

国文 2 期●元名張市役所職員

名張は古来、大和畿内の東端に位置し、東国への要衝の地として拓かれ、記紀に著され、伊賀地域内では唯一、万葉集に「ナバリ」が登場する。薬師寺縁起の記録、天武天皇皇女大来が建立したとされる国史跡夏見廃寺跡、それぞれ形状の異なる古墳群、中世とりわけ荘園史に必須の黒田荘、申楽談義に表れる能楽発生の地等々、これらの事象・事柄を点として各々の時代を端的に示し、その流れを帯として日本の歴史の変遷を垣間見ることができる。そんな名張に突然立地し、西部劇のヒーローのように忽然と去る「社会福祉学部」。翻って、伊勢は私の青い時を過ごした証の地である。同様に名張で過ごした学生達は変貌する現代社会とは無関係に心に、私同様、かけがえのない時を刻んだと想いかえす事でしょう。願わくばその場所は我が国の正史に表れる要衝の地であった事に想いを致して欲しいと。

地域福祉の芽を植えていただいた

田 畑 純 也さん

名張市まちづくり推進協議会副会長

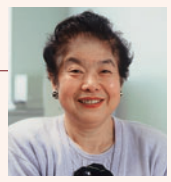
平成10年 4 月に社会福祉学部が開設。以降、先生・学生の皆様には名張市の地域福祉に多大なるご尽力をいただきました。平成16年、名張市が推進する名張地区の地域福祉計画につきましては、公民館でワークショップを開催し、今後の事業展開や方向性を皇學館大学社会福祉学部の皆様にまとめていただきました。

また平成18年、地域社会と大学が新しい形を目指して教育・研究両面の活動拠点とし名張駅前に「まちなか研究室・事務室」を大学により開設していただきました。その時のキャッチフレーズが「地域で育てる、地域を育てる」でした。その言葉どおり学生が企画・取材・編集し地域情報誌の発行を通じ地域連携を実践したのではないかと思います。名張地区に大学は大きな地域福祉の芽を植えていただいたのではないかと思います。今後はその芽を大きく育てるのが地域の役割だと考えています。

どんな実を結ぶのか注目したい

松 本 基 子さん

旧教員●社会福祉学部教授



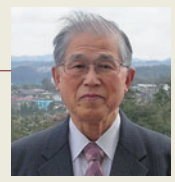
寒風が吹くある日、私は昔のゼミ学生と共に名張学舎を訪ねた。「私たちの心の拠り所、名張学舎が無くなってしまうんです」と悲鳴にも似たメールが何通か届いたのだ。社会の中堅として働いている卒業生にとって青春そのものである思い出の場に誘われ、共感することができた。

「社会福祉学部を創設し、歴史を築いていく!」――教職員も初期の学生も情熱と気概に燃えていた。そして、その学生等を受け入れ指導してくれた名張の様々な実習現場の指導者達にも心からの感謝。世界で少子高齢化の最先端を走り、益々重要になる福祉を縮小した皇學館大学を悲しみながら、名張に蒔かれた一粒の種が今後どんな実を三重県一帯に結ぶのか、名張で育った卒業生と共に注目していこう。

温故創新の気概をもって

津 田 達〈とおる〉さん

旧教員●社会福祉学部教授



名張に新設された社会福祉学部の情報系科目担当になったのは平成11年でした。「我が背子はいづく行くらむ沖つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ」と万葉歌で歌われているように、名張の地は古くからいわれのある所です。学舎は高台に建ち自然に恵まれた教育環境でした。社会福祉は高齢化が進む今必須の教育研究分野であり、とりわけ情報通信分野は働き手の人口が減る中でいずれ行き詰まる介護環境を劇的に変える可能性を秘めており今後一層重要性が増すと思います。平成16年に定年退職しましたが、その後の急激な少子化などにより今年度で名張学舎が撤退するのはまことに残念に思います。卒業生は大学で学んだことを基礎に新しいことを生み出す意を込めた**温故〝創〟新**の気概をもって社会に役立ってください。

さまざまな出会いに感謝

山村(山本)典子さん

旧職員

私が教務課職員・LL助手として勤務したのは名張学舎開設からたったの 4 年足らずです。その 4 年間に、やさしい上司やゆかいな仲間、生涯の師となる建部久美子先生、自分らしく生きる楽しさを教えてくださったジョン・ポッター先生ご夫妻などさまざまな出会いがありました。恋話、悩み相談、早すぎる死を迎えた愛ちゃん、学生さんたちの顔も頭をよぎります。そして、福祉との出会い。今、私は名張市内で流れている「FMなばり」でパーソナリティとして福祉のコーナーを放送しています。多くの人々と福祉の出会いを紡いできた名張学舎がなくなるのは本当に、本当に残念ですが、巣立っていった学生さんたちと共に、福祉の種を蒔いていきたいと思います。ありがとうございました。

学生や市民の方など
多くの人々に愛され
親しまれた名張学舎。
統合されるにあたり、
みなさまから寄せられた
心温まるメッセージを
ご紹介します。

題字
伊 藤 潤 一
卒業生 8 期●書家・新日本印刷工業㈱

福祉社会を担う大きな力に

伊 東 雅 法〈まさのり〉さん

現職員●就職課長

平成10年に名張学舎が開設される 1 年前、社会福祉学部の学生募集を担当していた私は東海・関西地区の高校訪問に駆けずり回りました。そして、将来は社会福祉の分野で貢献したいという多くの学生が入学してきました。平成15年 4 月に社会福祉学部就職課長として着任し、今度は在学生の就職指導という出口を支援する立場に。学生たちの社会福祉への志向は高く、自ら施設や地域のボランティア、自主実習に名乗りを上げ、スキルの向上と就職情報収集に躍起になっている学生で溢れていました。

就職率も 1 期生からOB・OGもいない中で約96%と大健闘。社会福祉学部全卒業生の約半数は福祉分野で活躍し、これからの福祉社会を担う大きな力となっていくに違いありません。

人を支える為のノウハウを学んだ

萩 原 豊 和さん

卒業生 1 期●八柱神社宮司、
社会福祉法人敬愛会・長谷山寮生活支援員

神職としての福祉とは何か…という疑問を持ちながら、完成したばかりの名張学舎に来た時の感動を今でも鮮明に覚えています。

福祉を学ぶ傍ら、櫻井治男先生引率の下、名張市内をはじめ三重県内各地での祭り見学、第 1 回～第 4 回の皇名祭においては神明宮にて斎主として奉仕させて頂く等、思い出に残ることは数多くあります。

現在、障害者福祉施設の生活支援員と縁ある地域の氏神様の宮司として神明奉仕に務めるなか、名張学舎で学んだ「人を支える為のノウハウ」が普段の仕事はもとより、氏子さん達との関わりの中にも活きていることが実感できます。

多忙ながらも充実した「今」があるのも、名張学舎と諸先生方の御蔭と深く感謝しています。

母校で学んだ経験を誇りに

村 井 美 紀さん

卒業生 1 期●みえ夢学園高校教諭

広々とした敷地に、真新しい校舎、初めて会う仲間たち…心機一転の新しい環境に胸躍らせ門をくぐったのがつい先日のようです。

名張学舎で学んだ 4 年間は、専ら自分探しをした時期だったと感じています。私は 4 年目にしてようやく目標を絞り、卒業後にも伊勢学舎と名張学舎を行ったり来たりしながら夢を叶えました。少し遠回りをしましたが、これまでに味わったことのない充実感がありました。これも、夢を追いかけるきっかけを与え、応援してくださった先生方のおかげであると、感謝をしております。

今もまだまだ勉強の日々ですが、母校で学んだ経験を誇りにしながら、成長し続けたいと思っています。

今の仕事に就くきっかけに

落 合 伸 也さん

卒業生 3 期●名張市社会福祉協議会

私は現在、名張市社会福祉協議会に勤務しています。今の職種を志したのは、学生時代に地域の方々と学生との軽スポーツを通じた交流会「愛ふれ」で地域に関わる魅力を感じたこと、恩師から「あなたは社会福祉協議会に向いている」と言われたことがきっかけでした。それらは、社会福祉協議会の職員になった今も自分の基本にあると思います。本当に感謝しています。

今も大学の前を通るたびに、「自分はどんな気持ちで今の仕事に就きたいと思っていたのか」ということをいつも振り返っています。社会福祉学部が無くなることは非常に残念ですが、学生生活においての様々なつながりはこれから先も大切にしていきたいと思います。

お世話になった教職員の皆様、本当にありがとうございました。

社会人として大切なことは みんな大学時代に教わった

勝 田 茂 樹さん

卒業生 4 期●松阪ケーブルテレビ

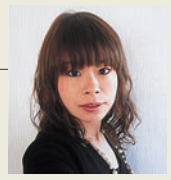
学生時代に高齢者運動会や大学祭、商店街のイベントなどに参加する中で私は多くの仲間を見つけ、人と関わる楽しさに気付くことができました。特に、街を盛り上げようと一生懸命に市民活動を続ける大人達を見て、この人達を皆に知ってもらいたい、応援したいという気持ちからケーブルテレビで働くことを決めました。その気持ちは揺らぐことなく、僕は働いています。

現在も、休日になると大学時代の仲間を誘い、市民活動やボランティアを続けています。今の私の夢は、障害者が集うカフェをつくることです。「ええ街にしたい」その思いの源にはいつも大学があります。大学時代があったから、夢を見る今があると感謝しています。

名張学舎はわたしの原点

前 川 り さ さん

卒業生 8 期●里山学院児童指導員



入学前、消極的な自分を変えたくて「大学では自分で決めたことをやりぬく」と心に決めました。それが原動力となり、様々な経験を積むことができました。中でも印象深いのは、皇名祭実行委員長を務めたことです。理想と現実との差や、自分の無力さに悩みました。しかし、教職員の皆さんや同学年の仲間達、先輩・後輩、そして地域の方々のおかげで無事に任務を全うすることができました。

卒業後も、自信が持てなくなると名張学舎に足を運びました。いつも思い出すのはあの時の気持ちであるからです。

「名張学舎」は私の「原点」です。私たちの愛した場所が、新たな学びの場で再び活気付くことを願っています。

成長して巣立っていってくれた

藤 本 和 大〈かずひろ〉さん

居酒屋「きはらし」店主

社会福祉学部が開設されてから名張の町には学生さんが増え、地方からやって来た人も多くいて、活気づいていました。アルバイトをしてくれる学生も 1 期生から続いています。エピソードとして思い出に残っているのは高島昌二先生(前学部長・現名誉教授)のこと。先生がお店によくお見えになっていた時、可愛がってくれていたアルバイトの女の子に「生ビールの泡は 1 センチがおいしい」とおっしゃられ、以来、泡は少なめにしていました。そんな常連客ならではのやり取りも楽しかったです。アルバイトの学生を叱りとばしたこともありますが、卒業する頃にはみんな成長して巣立っていってくれました。大学がなくなるのは本当に残念です。名張の駅前に「きはらし」という店があったことを思い出していただければ嬉しいです。店に寄っていただいた多くの教職員の皆さん、学生さん、ありがとう。

第二のふるさとと思って

飯 野 好 孝〈よしたか〉さん

お食事処「いいの」店主

名張学舎の印象は駅前の「まちなか研究室」での活動をはじめ、地域との関わりを大切にする学生さんがたくさんいたように思います。当店もサークル等の新入生歓迎会や卒業生を送る会などで多く利用していただきました。今も、遠くに離れて暮らす卒業生が名張に帰ってきた際に立ち寄ってくれたり、名張で就職した人たちの中には地域の消防団で一緒に活動している若者もいます。名張学舎はなくなってしまいますが、どうか第二のふるさとと思ってまた元気な顔を見せてください。みなさんの今後のご活躍を期待しています。

「帰る場所」のような存在

小田谷〈おだたに〉 美緒さん

現 3 年生

名張学舎を離れることも、春から伊勢に通うこともまだまだ整理ができていない自分が居ます。ただ、撤退の準備が進む大学と、学生の姿がほとんど見られない静かな学舎から、その現実を受け入れざるを得ない状況です。

今振り返ると、特別な何かではなく、名張学舎で過ごした何でもない日常が大切な想い出なのだと思います。

卒業生が名張学舎に遊びに来ているように、卒業後に同期生と共に名張学舎に訪れ、大学生活の想い出を語るのが私の夢でした。私にとって名張学舎は「帰る場所」のような存在になっていたのだと思います。

たくさんの想い出をくれた名張学舎と、その想い出を共に過ごしてくれた方々に感謝します。

充実した日々を送れたことに感謝

榎 本 恵 実〈めぐみ〉さん

現 2 年生

沖縄から名張の祖父母宅に引っ越すこともあり、社会福祉学部へ進学を決めました。

内地のことも知らず知り合いすらいない状態から始まり不安でしたが、入学後の曽爾合宿で友達ができ、先輩や教職員の皆さんとも親しくなれました。今では、学内唯一の沖縄出身ということもあり、本名よりも「ちゅらさん」のあだ名で名前が通るほどになりました。

課外活動ではフットサル部のマネージャー等をはじめ、学生支援センターの学生スタッフ、叶教授主催の「遊び塾」サポーター、また皇名祭では製作部署員を務めました。大学を通して多くの方々と関わり、たくさんの経験ができました。充実した 2 年間を送れた名張学舎に感謝しています。

伊　勢　統　合　特　集

名張学舎13年のあゆみ

平成23年 4 月より社会福祉学部は伊勢学舎に統合され、惜しまれつつも名張から姿を消すこととなりました。平成10年の開設以来、地域に開かれた大学として愛されてきた13年。その軌跡をたどります。

平成 9 年 (1997)

- 社会福祉学部設置認可

平成10年 (1998)

- 名張学舎竣工祭・竣工式挙行
- 名張学舎神明社鎮座
- 社会福祉学部開設（高島昌二学部長）
- 第 1 期生265名入学
- 岡田重精理事長就任
- 月例文化講座第 1 回開催
- 第 1 回大学祭「なバリ愛フリー」開催
- 紀要創刊

竣工式

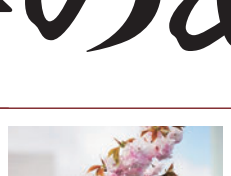
平成11年 (1999)

- 学会誌『社会福祉論集』創刊
- 第 2 期生230名入学

社会福祉論集

平成12年 (2000)

- 第 3 期生250名入学
- 大庭脩学長就任



平成13年 (2001)

- 法人名称を「学校法人皇學館」、大学名表記を「皇學館大学」に変更
- 第 4 期生234名入学
- 上杉千郷理事長就任

平成14年 (2002)

- 第 1 回卒業生273名学位記授与式挙行
- 大学院社会福祉学研究科修士課程開設（昼夜開講）
- 教職課程・保育士課程・専修免許課程設置
- 第 5 期生236名／院 9 名入学

卒業祝賀会

週末あそび塾

平成15年 (2003)

- 社会福祉学部地域福祉文化研究所設置（大野光彦所長）
- 地域福祉文化研究所事業「週末あそび塾」開始
- 第 6 期生263名／院 4 名入学
- 伴五十嗣郎学長就任

1号館前の"春日富士"

平成16年 (2004)

- 地域福祉文化研究所フォーラム開催
- 第 7 期生244名／院 7 名入学

遷座奉祝祭

平成17年 (2005)

- 社会福祉学部（櫻井治男学部長）
- 3 コース制導入
- 学生支援センター設置
- 第 8 期生248名／院 3 名入学
- 名張学舎神明宮遷座祭斎行

皇名祭（第 9 回）

平成18年 (2006)

- 地域福祉文化研究所（宮城洋一郎所長）
- 介護福祉士養成施設校指定
- 教職課程に養護学校教諭を増設
- 4 コース制に発展
- 初年次教育を開始
- 第 9 期生222名／院 8 名入学
- まちなか研究室事務室開室

平成19年 (2007)

- 名張市と皇學館大学との連携に関する協定を締結
- まちなか研究室開室（名張市榊町）
- 三重県立名張高等学校との高大連携による授業開始
- 小学校教員免許状課程履修に関する協定を皇學館大学と佛教大学との間で調印
- 第10期生159名／院 6 名入学

名張市との締結式

平成20年 (2008)

- 「平成20年度　二国間交流事業　中国との共同研究」（日本学術振興会）採択
- 市民フォーラム開催
- 2 専攻 5 コースに改組
- 教職課程に幼稚園教諭を増設
- 開設10周年記念事業開催
- 国際学術シンポジウム「日本とアジアの社会福祉のゆくえ」を開催
- 第11期生105名／院 5 名入学

平成21年 (2009)

- 第12期生72名／院 3 名入学
- 佐古一洌理事長就任

平成22年 (2010)

- 学生募集停止
- ホームカミングデー開催
- 名張学舎月例文化講座終了（通算121回）
- 名張学舎閉鎖

ホームカミングデー

平成23年 (2011)

- 社会福祉学部、伊勢学舎へ移転

学部長インタビュー

社会福祉学部長
櫻 井 治 男 先生

学生たちに感謝

――名張学舎での13年間を振り返り、今どのような思いですか

社会福祉学部の設置は本学にとって大きな挑戦でした。新しい学部を、新しい地で、新しいスタッフとともに一から創り上げていくんだという気概に満ちていましたね。日本の歴史・文化を教授する本学が、福祉の分野に踏み出すことに疑問視する声もありました。しかし、神宮皇學館以来の長き伝統を受け継ぐ学校が現代社会の課題に向き合うことに多くの方が篤い信頼を寄せ、後押ししてくださいました。これまでに輩出した人材はおよそ2,000人。神道福祉を理念とする学校としてひとつの開発性を示すことができたのではないかと考えています。

――地域においてどのような役割を果たしたとお考えですか

大きく 3 つあると考えています。ひとつは知的拠点としての役割です。図書館は一般の人が貸し出しできますし、月例文化講座を開催したり、ハード・ソフト両面において活用していただけるようにしました。次に、研究組織として日本の福祉のあり方に方向性を発信することができた点です。現在の社会福祉における制度やシステムは欧米をモデルにしていますが、本来、福祉はその国の文化・社会と密接に関わっているもの。本学ではアジアを基軸に欧米との比較の観点から福祉の諸問題を研究し、関連の国際シンポジウムを開催するなど日本型福祉について考察を進めてきました。

最後は協働による地域活性です。三重大学と伊賀文化フォーラムを開催したり、「まちなか研究室」を拠点に地域、学生、教師が一丸となって多彩な活動を行ってきました。

――地域との結びつきが強い学舎、学科という印象があります

そうですね。その意味では学生たちにいちばん感謝しています。ボランティア活動や祭り、イベントなどの地域活動に学生たちが自らの意思で積極的に参加してくれました。彼らの行動を通して学部の特性や教育の成果が伝わり、市民の方々に温かい目で見守っていただけたのだと思います。皇名祭（大学祭）には多くの地元の方が来場され盛り上がりましたし、真の意味で地域に溶け込んだ学部でした。伊勢学舎に移転してもこれまでに培ってきた絆、信頼関係は続いていくでしょう。学生たちがこの学部で得た経験や人脈、学んだことを生かして活躍してくれることを期待しています。

センター試験、二八〇人が受験

寒波の襲来で厳しい寒さとなった一月十五日・十六日の両日、センター試験が行われた。最近の経済状況を反映してか国公立志望者は増えており、センター試験を利用する私大も増加。また、推薦入試においてセンター受験が義務化されたこともあり、志願者数は年々上昇している。

今年度、本校からは約二八〇名の生徒が受験した。試験前日の一月十四日には彼らを対象に激励会が実施され、進路指導部の坂本昌也先生が注意点などを説明。〝サクラ咲く〟と印字された合格祈願の鉛筆を中村貴史校長から手渡されると生徒たちは日頃の勉強の成果を発揮すべく闘志を新たにしていた。試験当日は〝栄光を摑め！皇學館高校〟と書かれた横断幕や幟が迎える中、担任の先生や校長・両教頭先生から励ましの言葉を受け、生徒は試験会場の皇學館大学へと向かった。

センター試験激励会で、受験生に合格祈願鉛筆を手渡す中村校長。

井面常務理事より激励のお言葉をいただく。

月次祭の神宮参拝を実施

ここ数年は暖冬の影響で寒さを感じない中で実施されていた月次祭の神宮参拝だが、今回は厳しい寒波に見舞われた。

昨年十二月十七日、張り詰めた寒気に玉砂利を踏みしめる音が心地よく響く中、生徒たちは整然と列をなして正殿へと進み、厳かな雰囲気のうちに参拝を終えた。

参拝の後、一年生は総合学習のために荒祭宮方面（担当・相原誠先生）、旧林崎文庫方面（担当・笠井千絵先生）、風日祈宮方面（担当・山本直明先生）へとクラス単位で分散。それぞれの場所で担当の先生方から詳細な説明を受け、帰校後、ワークシートの作成に取り組んだ。

旧林崎文庫前で。

春高バレー、三年連続・九回目の全国大会出場

昨年十一月二十日に開催された通称〈春高バレー〉三重県大会決勝で男子バレー部がフルセットの末に四日市工を破り、県下四十校の頂点に立った。これで男子バレー部は三年連続九回目の春高バレー全国大会出場という快挙を達成。県内外にその名を知らしめることとなった。

今回から大会名が「全日本バレーボール選抜優勝大会」に変わり、実施時期も三月下旬から一月上旬へと大きく変更されたため三年生の参加が可能になった。終業式の行われた十二月二十四日に壮行会が行われ、井面護常務理事より激励の言葉を頂戴した。新年一月五日には対日本航空（山梨代表）戦に臨んだが、セットポイント〇―二で惜敗。三年生にとっては高校生活最後の試合は終わった。しかし三年間の集大成を〝春高バレー〟という大きな舞台で発揮できたのは生涯忘れられぬ思い出になったであろう。

皇高NEWS

三年B組が総合優勝

二学期スポーツ大会

昨年十二月二十一日に校内スポーツ大会が実施された。二学期の競技はバドミントン。男女でそれぞれ二リーグに分かれ、一チーム三組で競い総合得点で勝敗を決した。初の全校スポーツ大会となった今年度は新しくなった第二体育館で実施された。生徒たちは日頃の練習の成果、チームの団結力を見せ、一生懸命プレーした。自分の試合がないときでも男女学年を問わず応援する場面が多く見られ、生徒全員で試合を盛り上げていた。

総合優勝…三年B組
準優勝…三年A組、二年B組

熱心に声援を送る生徒たち。

日々の成果が発揮された百人一首大会

萩原莉花さんが個人優勝

毎年恒例の第十一回百人一首大会がセミナーホールにおいて一月十四日、行われた。

競技は六歌仙にちなみ六組のクラス別対抗で行われ、各組の総合獲得枚数により優勝クラスを決した。

今年も上の句の五文字で札を取る生徒が多く、日々の学習の成果が発揮されていた。競技の最初には札の場所を覚える暗記タイムが設けられ、自分の得意な札の場所などを集中して覚えていた。狙っていた札を取るスピードは素晴らしく、札を手にした生徒の誇らしげな表情も大変印象的であった。喜んだり悔しがったりと選手も盛り上がり、どのクラスが取ったのかカードが各組から上がると観客席からも大きな声援が送られた。

最後に、各クラスの代表生徒による個人戦が行われた。

五十首から三十首を競うもので、代表六名の生徒たちの実力に観客席も魅了された。個人戦のためクラスの勝敗には関わらないが、自分のクラスの代表を応援する歓声は素晴らしく一番の盛り上がりを見せた。

総合優勝は三年B組、準優勝は三年A組。組別優勝は小町三年A組、業平三年B組、遍昭三年A組、喜撰一年A組、黒主三年A組、康秀三年B組。個人戦優勝は萩原莉花さん（三A）、準優勝は奥田健吾さん（二A）、吉田真さん（二B）であった。

上の句で札を取る生徒。

個人戦で奮闘する代表生徒たち。

武道・バドミントン大会を開催

昨年十二月十五日に武道・バドミントン大会が開催された。例年通り女子は全学年を通じてバドミントン、男子は危険性を考慮して参加が許されていない一年生を除き、剣道と柔道に分かれてそれぞれ熱戦を繰り広げた。競技方法は個人の部とクラス対抗の部の二部形式。バドミントン個人の部はダブルスの形で実施され、選手たちはそれぞれ個人優勝やクラス優勝のために全力を尽くした。各部門の優勝者は以下の通り。

【剣道】団体…三年五組、個人…中森新之輔（二年六組）
【柔道】団体…三年四組、個人…山本大輔（二年四組）
【バドミントン】団体…三年八組、ダブルス…二年七組（村田陽子・濱地莉紗）

シャトルの行方は？

皇學館高等学校創立五十周年・皇學館中学校創立三十五周年記念事業　寄付者芳名

皇學館高等学校創立五十周年・皇學館中学校創立三十五周年記念事業募金活動は、十九年六月、正式にスタートいたしました。これは、募財活動の中心を「生徒の教育活動支援」に置いているものでありますが、十二月三十一日現在での募金状況は、次の通りになっております。ご協力いただいた皆さまのご理解に感謝申し上げますと同時に、今後のご賛同・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

宗教界（神社界）

神奈川県
三十万円　寒川神社様（高座郡寒川町）

一般（旧教職員・篤志家等）

三重県
三万円［一万円増額］　長谷川明久様

企業

三重県
五万円　宇治園様

同窓会会員

三重県
一万円　浦和真次郎様
一万円　岡田大志様
一万円　西和久様

後援会賛助会員

三重県
一万円　安立卓也様

皇學館高等学校創立50周年・皇學館中学校創立35周年記念事業寄付金進捗状況　平成22年12月31日現在

区分	申込件数	申込金額(円)	納入金額(円)
宗教界	3	450,000	450,000
企業	42	4,240,000	4,180,000
一般（旧教職員・篤志家等）	15	435,000	435,000
同窓会会員	151	6,861,000	6,861,000
後援会賛助会員	64	1,095,000	1,095,000
本法人関係	125	3,685,000	3,635,000
合計	400	16,766,000	16,656,000

創立一三〇周年・再興五十周年記念事業　寄付者芳名

創立一三〇周年・再興五十周年記念事業募金につきまして、学内外の方々から変わらぬ励ましの声とともにその後も多くのご芳志をいただきました。みなさまのご理解とご好意に対して心より厚く御礼申し上げると同時に、ご協力いただいた方々の芳名を掲載させていただきます。事業活動の一層の充実をはかるべく、今後ともどうぞよろしくお願い致します。芳名掲載につきましては、十二月三十一日までの到着分とさせていただきます。

創立130周年・再興50周年記念事業寄付金 進捗状況

平成22年12月31日現在

区　分	申込件数	申込金額(円)	納入金額(円)
宗教界	634	776,897,000	765,837,000
館　友	724	79,344,000	76,629,000
篤志家	46	31,855,000	31,735,000
萼の会	2,070	93,891,000	93,891,000
企　業	104	62,285,000	60,945,000
本法人関係	256	58,722,000	58,472,000
合　計	**3,834**	**1,102,994,000**	**1,087,509,000**

館友

三重県
三万円［一万円増額］　加﨑　千恵様

兵庫県
六万円　髙澤　由紀様

和歌山県
十万円　江尻久仁子様
十万円　江尻ひでみ様

長崎県
二万円　平山茶道会館様

萼の会（保護者の会）

神道学科
十五万円　宮川　貢様
三万円　浅原　稔様
三万円　東　秀美様
三万円　稲田　昌史様

篤志・その他

三万円　岡田　愛弘様
三万円　金井　一雄様
三万円　川上　惠三様
三万円　北島　清博様
三万円　塩谷　尚志様
三万円　生野　公治様
三万円　髙橋　勸様
三万円　谷口　学様
三万円　山道　一夫様
三万円　山元　義清様
三万円　吉見　英和様

国文学科
五万円　日野　正彦様
三万円　今西　孝彰様
三万円　萱原千恵実様
三万円　神部　尚弥様
三万円　吹上　誠司様
三万円　森　通様

国史学科
三万円　石川　恭彦様
三万円　黄木　悟様
三万円　奥山　憲一様
三万円　五藤　嘉一様
三万円　古部　明彦様
三万円　松木　仁様
三万円　山本　桂様

コミュニケーション学科
三万円　浦野　功様

社会福祉学科
三万円　宇佐美秀臣様
三万円　大塚　章郎様
三万円　神田　経二様
三万円　河戸　仁史様
三万円　小田谷　司様
三万円　斉田　敏光様
三万円　藤原　直士様
三万円　山口浩次郎様

教育学科
五万円　西﨑　正様
五万円　平生　雄士様
三万円　青木　義美様
三万円　石坂　健様
三万円　平田　晶久様
三万円　前川　為光様
三万円　水本　昌克様
三万円　山口　八郎様
三万円　山下　貞則様
三万円　芳川　雅行様

現代日本社会学科
三万円　奥山　利治様
三万円　鈴木　和昭様
三万円　牧田　勝広様
三万円　山本　澄香様

本法人関係

法人
五十万円　井面　護様

個人情報保護に関する法律の施行に伴い、ご芳名・金額等の掲載をご希望されない方々につきましては、別記とさせていただきました。■萼の会／31名

教員免許状更新講習
開講のお知らせ

「教員免許更新制」とは教員として必要な資質能力が保持されるよう、最新の知識技能を身に付けることをめざすものです。平成21年４月１日以降に授与される教員免許状の有効期限は10年で、それ以前の免許状取得者にも更新制の基本的枠組みが適用されます。免許状を更新するには、修了確認期限満了前の２年間に30時間以上の更新講習を受講、修了することが必要となります。

伊勢会場　皇學館大学　伊勢学舎

平成23年 **8月18日(木)・19日(金)・22日(月)～24日(水)**
- 必修領域●8/18・19 ……〈12時間〉
- 選択領域●8/22～24 ……〈18時間〉

四日市特設会場　じばさん三重

平成23年 **8月18日(木)～20日(土)・22日(月)・23日(火)**
- 必修領域●8/18・19 ……〈12時間〉
- 選択領域●8/20・22・23 ……〈18時間〉

受付期間

第1次　平成23年 **6月1日(水)** 16時から ▶ **7日(火)** 15時まで
必修・選択領域のセットでの申し込みのみの受付となります

第2次　平成23年 **6月13日(月)** 16時から ▶ **15日(水)** 15時まで
必修・選択領域のセット申し込み、各領域のみの申し込みが可能です

※定員になり次第受付を締め切ります。第２次受付については、第１次受付で欠員が生じた場合のみの受付となります。

受講対象者

満35歳	昭和51年４月２日から 昭和53年４月１日までに生まれた方
満45歳	昭和41年４月２日から 昭和43年４月１日までに生まれた方
満55歳	昭和31年４月２日から 昭和33年４月１日までに生まれた方

平成24年及び25年３月31日に修了確認期限を迎える現職教員等（30時間のうち、必修領域12時間は全教員、選択領域18時間は養護教員を除く全教員）の方が対象となります。文部科学省HPにて確認できます。

文部科学省HP
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/koushin/003/index.htm

※講習を受講する際には校長等所属長による受講対象者であることの証明が必要です。後日、お送りする書類に証明を受けて提出してください。

講習に関する照会先
皇學館大学 学生部 教職支援室
教員免許状更新講習係
TEL 0596-22-6049　FAX 0596-21-0541
E-mail kyosyoku@kogakkan-u.ac.jp
HP　※HPの申込画面は受付開始時刻にならないと入力できません。
http://www.kogakkan-u.ac.jp/html/student/p09.html

画像を用い、わかりやすく伝える鈴木市長。

式年遷宮に向け市の構想語る
市長トークinキャンパス
～鈴木健一伊勢市長が講演～

一月二十日、伊勢学舎の記念講堂において「市長トークinキャンパス」が開かれた。これは、必修科目「伊勢学」および伊勢市との連携協力協定の一環として三年連続で開催されており、鈴木健一伊勢市長が「これからの伊勢」をテーマに講義を展開。まずは過去の伊勢のまちづくりの例を挙げ、遷宮とともに発展してきたまちの歴史を当時の写真を交えながらわかりやすく紹介した。また人口推計から読み取れる伊勢の二十年後を提示し、現在と比較。二十年後には伊勢の人口が十五％減少すること、三人に一人が高齢者になること、少子化が進行することなどを具体的な数値で予測した。

それらをふまえた上で、鈴木市長は住民満足度ナンバーワンのまちをめざすと宣言。誰もが安心して暮らせるまちを「〝笑〟子化・〝幸〟齢化」と例え、雇用・住居・育児・教育・医療のさらなる充実を目指すと述べた。

また平成二十五年の遷宮にむけた構想も紹介。第二伊勢道路や、国道23号と県道鳥羽松阪線を結ぶ秋葉山高向線の建設といった交通インフラの整備などを伝えた。

講演終了後、教育学科一年生の渡邊絵理さんは「遷宮とあわせた市の新しい取り組みに魅力を感じた。自分たちも積極的にまちづくりに関わりたい」と感想を語った。

先輩、お元気ですか
OB・OG訪問

青山　隆生　氏

日光東照宮戦後六十年史編纂顧問

国文学科　第四期（昭和四十四年三月）卒◆同年四月、日光東照宮に神職として奉職し、「日光東照宮境内七堂塔所有権確認等事件」などを担当。禰宜、権宮司代理を歴任。平成二十二年七月満六十五歳で定年退職し現職。同年七月『靖国の源流―初代宮司・青山清の軌跡―』（青山幹生・堀雅昭・青山隆生共著、玄書房）を上梓した。

広島県の片田舎の農家に生まれた私が皇大を志望したのは、四百年前の先祖が毛利元就、輝元に仕えた元神職の家系だと聞かされ、自分も神職になろうと志したからである。伊勢で学んだ四年間が自分の将来を方向付けたことは言うまでもないが、とりわけ三、四年次の体験が今の自分を形成したと思っている。

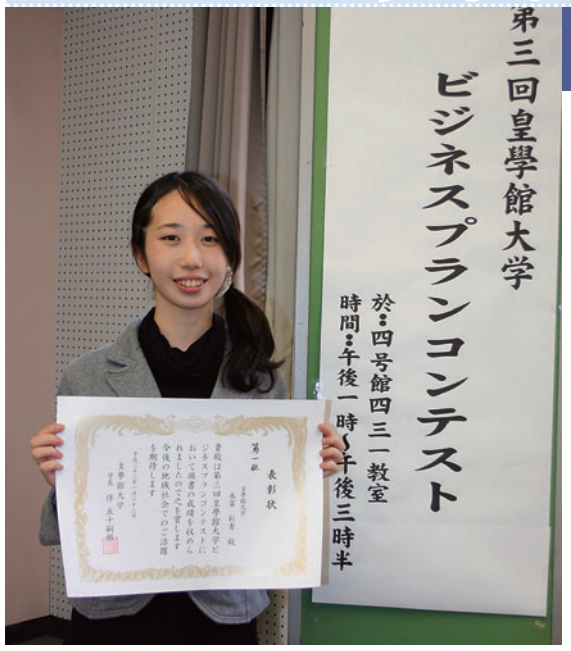
三年生進学時、指導教官の谷省吾先生から「伊勢青々塾」に入塾を勧められた。青々塾は国史学の泰斗である平泉澄先生が主宰された塾で、ここでは皇學館高校生数人を含む十数名の塾生が生活し、寝食を共にしていた。教授の田中卓先生が塾頭、所功先輩が塾頭代（一年後に三輪尚信先輩）で、月に二～三回、夜半に輪講や御講義祖述が開かれた。御講義祖述には文学部長の久保田収教授以下、平泉先生門下の国史学科の先生方がずらりと出席された。塾外生も多数参加し、吉田松陰先生の『講孟劄記』など先哲の遺文を読み、日本の国体や日本人の道義について学んだ。

私は卒業までの二年間、ここから大学に通った。入塾後に初めて「これは大変な所へ来てしまった」と気付いたが、二年間の塾生活で「学問とは何か」を学ぶことができた。ちなみに清水潔次期学長とも一年半、一緒に生活した。この間、皆に煽てられ、学友会総務委員長を引き受けて苦しんだりもしたが、今では懐かしい思い出である。

本学4年 永富彩香さんが優勝

第3回 皇−1グランプリ

一月二十三日、本学伊勢学舎において皇學館大学ビジネスプランコンテスト、通称「皇−1グランプリ」が開催された。同コンテストは新たな地域産業の掘り起こし、ビジネスの芽を育てることを目的に㈶三重県産業支援センターの助成を受けて行われるもので、今年で三回目。今回は五十件の応募があり、優勝者には本学教育学科四年の永富彩香さんが選ばれた。



「おじいちゃんにさっそく報告します」と喜びを語る永富さん。

応募が倍増超

「皇−1グランプリ」は、三重県やその周辺地域の高校、大学(短大・高専を含む)に通学もしくは同地域に居住する学生を対象に開催している。若者らしい独創的・革新的なアイデアによるサービス展開や商品開発、新たな顧客と市場開拓が見込めるビジネスプランを募集している。一昨年に開かれた第一回には二十一件、第二回には二十三件の応募があったが、今回は五十件と倍増超。書類選考による一次審査を通過した上位六チームが一月二十三日の公開プレゼンテーション大会に臨んだ。

決勝へ進出を決めた六チーム(※別記参照)は六人の審査員と聴衆を前に五分の持ち時間内で堂々としたプレゼンを展開。パワーポイントや手作りの小道具を用いながら柔軟な発想とアイデアが詰まった地域活性化プランを披露した。各プレゼン後の質疑応答タイムでは審査員から販促方法やターゲット、運営の仕方などについて質問が相次ぎ、熱のこもった大会となった。

実現性、説得性を重視

みごと優勝に輝いたのは本学教育学科四年の永富彩香さんが提案した「老人が輝けば町も輝く・キララビレッジ」プランだ。内容は、廃校を改装して明治から昭和にかけての雰囲気を醸し出し、高齢者に住みよい小さな町をつくるというもの。映画館や囲碁・将棋、麻雀などができる娯楽スペースのほか銭湯やカフェ、図書館など暮らしを楽しむ施設を完備し、従来の老人ホームや介護福祉施設にはない構想となっている。アイデアの基となったのは祖父の存在だ。「おばあちゃんが亡くなってからすっかり元気をなくしてしまったおじいちゃんがイキイキできるような町をイメージした」と語る永富さん。審査員からは「実現性が高く、自身の経験に基づいたプランだけに説得力がある」と高評価を得た。

二位には徳風高校の「ローカルキッチン」、三位には鈴鹿高校の「訪問！隣の美容院！」が選ばれた。

プレゼンを見守る審査員の方々。

実践力のある人材育成を

司会を務めた筒井琢磨現代日本社会学部教授は今回の傾向として高校生からの応募が半数を超えたことを挙げ、「若いビジネスパーソンの存在は頼もしい限り。このコンテストへの応募を授業の一環として取り組む高校も出てきた」と話す。また、内容についても「これまでは年配層をターゲットにしたプランがほとんどだったが、今回は若年層やOLを対象にしたアイデアが出されるなど幅が広がった」と手応えを感じた様子。ゆくゆくは高校と大学が連携し、学生が主体となって同大会を運営していくことをめざしており、リーダーシップや実践力のある人材育成を教育面から支えたいと話す。

皇−1 グランプリ決勝進出ビジネスプラン 概要

1. **スタイルフリー**(福祉型地域運送業務)
   皇學館大学２年　濱　涼祐
2. **「老人が輝けば町も輝く」キララビレッジ**(生涯学習施設)
   皇學館大学４年　永富彩香
3. **ぜいたく茶タイムで地場産業と地域活性化**
   四日市大学４年　白井佐季子
4. **訪問！隣の美容院！**　鈴鹿高等学校１年　須藤由菜
5. **写真で深まる親子の絆**
   宇治山田商業高校３年　古田沙有紀・吉居美奈・脇　皇貴・中島愛恵・中田亜衣・藤本愛美
6. **ローカルキッチン**(学校給食とスーパー連携による移動販売)
   徳風高等学校３年　奥村真子・佐脇悠馬・堀井詩歩

卒業記念ミュージカル開催告知

「西遊記」 3／5(土)・6(日)

教育学科四年生有志は三月五日(土)、六日(日)に行われる卒業記念ミュージカルの制作に励んでいます。昭和六十二年度の初公演から今回で通算二十四回目を数えます。活動メンバーは実行委員会を中心とする九つの班(脚本・衣粧・音響照明・会場・パフォーマンス・道具・音楽・合唱・広報)。うち、広報班はミュージカルの告知と子どもたちとの触れ合いを目的に、市内の幼稚園や保育園で紙人形劇による広報活動をしています。紙人形劇だけでなく会場班が考えた手遊びをしたり簡単なゲームをしたりと、子どもたちがよりミュージカルに興味・関心を持ってくれるよう工夫しています。

これらの活動を通じ、ミュージカルの存在を知っていただくと共に、本年四月から実際に教育現場で働く者にとっては貴重な体験となっています。

私たちはまだまだ未熟ではありますが、これまで実習やボランティアでお世話になった幼稚園や保育園、小学校などの子どもたちや先生方、ご指導・ご支援してくださった本学の教職員の皆様に心ばかりの感謝の気持ちを表したいという強い思いのもと、持ち味を生かせる良いステージを創ろうと、日々練習に励んでおります。

皆様お誘い合わせの上、ご来場賜りますよう、お願い申し上げます。(ミュージカル実行委員会・広報班)

「西遊記 ～仲間がおしえてくれたもの～」

日時● 平成23年 **3月5日(土)・6日(日)** 入場無料・予約不要
【開場】13時 【開演】13時30分 (公演時間：約２時間)

場所● **皇學館大学 伊勢学舎 記念講堂**

問合せ　皇學館大学学務課　☎0596-22-6315
(平日 9:00～16:30、土曜日 9:00～12:00)

2カ月イベント情報

2月

13(日) 皇學館大学特別講座「立志塾」　伊勢学舎
日本人としての家族・郷土・国家を考える
◆鉄道情報システム常勤監査役　田尾憲男 氏

3月

5(土)・6(日) 教育学科卒業記念ミュージカル　伊勢学舎
西遊記◆教育学科４年生有志

卒業式についてのお知らせ

平成22年度 学位記・修了証書授与式および祝賀会を、下記の日程で執り行います。

平成23年３月18日(金)

❶神宮(内宮・外宮)参拝 ▶外宮表参道手水舎前 集合
文学部・文学研究科・神道学専攻科……8:50～
社会福祉学部・社会福祉学研究科……9:00～
❷学位記授与式 ▶伊勢学舎記念講堂……11:30～
❸教員免許状・階位證等交付 ▶各教室……12:50～
❹祝賀会 ※卒業生ご家族の皆様もご参加いただけます。
文学部・文学研究科・神道学専攻科▶総合体育館……14:00～
社会福祉学部・社会福祉学研究科▶倉陵会館……14:10～

イベントの時間・申込方法等のお問合せは各学舎まで
伊勢学舎☎0596・22・0201㈹　名張学舎☎0595・61・3351㈹

編集後記

◆今回は、名張学舎(社会福祉学部)特集号として編集しました。五面では、名張学舎を温かく包んでいただいている皆様にご登場いただきました。◆名張学舎は本年三月をもって、伊勢学舎へ統合となり、名張での歴史を一度閉じることになります。学舎統合後(四月以降)の使用が決定している近畿大学工業高等専門学校の新校舎建設も現在急ピッチで進められています。◆インタビューでは、様々な方々からお話を伺いました。社会福祉学部が地道に築いてきた草の根的なネットワーク、加えて地域でのその存在価値の大きさを改めて思い知るに当たりました。名張学舎はこれからも燦然として、人々の心の中で永遠の輝きを放つことでしょう。ありがとうございました。【総務課】

近鉄文化サロン・皇學館大学共催 講座のご案内

平成23年度 前期 4月～9月

神道の入門やその歴史など日本文化の核心に触れていただき、「日本文化の歴史」に親しんでいただきます。

古事記を読む

講師 **白山芳太郎** 神道学科教授

来年2012年は神話の宝庫『古事記』が完成して1300年の年。古語の持つ魅力を感じながら一緒に読んでいきましょう。

【受講料】６回分　6,000円(税込)

4/ 9(土)◆天地初発
5/14(土)◆列島誕生
6/11(土)◆イザナミノミコトの死
7/ 9(土)◆禊ぎ
7/30(土)◆スサノオノミコト
9/10(土)◆天石戸ごもり

神道と仏教

講師 **河野　訓** 神道学科教授

神仏習合と神仏分離の諸相を３回ずつに分けてお話します。

4/23(土)◆神仏習合の諸相❶ 本地垂迹思想
5/28(土)◆神仏習合の諸相❷ 権現と本地仏
6/18(土)◆神仏習合の諸相❸ 神前読経
7/23(土)◆神仏分離の諸相❶ 江戸時代の神道家による仏教批判
8/20(土)◆神仏分離の諸相❷ 神仏分離令とその全国への波及
9/24(土)◆神仏分離の諸相❸ 近畿地方と伊勢地方における神仏分離

【受講料】６回分　6,000円(税込)

特別公開講座

【受講料(税込)】会員 1,000円　一般 1,500円 ※入会金は不要

5/21(土)◆日本古代の罪と祓(はらへ) ～大祓詞(おおはらへのことば)講釈～(1)
7/ 2(土)◆日本古代の罪と祓 ～大祓詞講釈～(2)
講師 **本澤雅史** 神道学科教授
神社では６月と12月の晦日に「大祓式」が執り行われ天下の罪が祓われます。本講座では「大祓式」で読まれる「大祓詞」を講釈します。

7/16(土)◆戦う神主たち　講師 **松本　丘** 神道学科准教授
諏訪大社や宗像神社などを例に、南北朝時代や戦国時代に武器をとって戦わざるを得なかった神職たちの劇的な生き様を探ります。

8/27(土)◆折口信夫(しのぶ)と神道　講師 **半田美永** 国文学科教授
古典学や民俗学をはじめ、小説や詩歌においても多大な業績を残した折口信夫、筆名・釈迢空の言説を通して、その神道観を考えます。

9/ 3(土)◆摂津国一宮の住吉大社と和泉国の諸大社
講師 **井後政晏** 神道学科教授
摂津国の一宮とされていた住吉大社の実態と関連する祭祀、和泉国の総社や大社の祭儀について注目していきます。

【時間】15:30～17:00
【会場】**近鉄文化サロン阿倍野**
大阪市阿倍野区阿倍野筋2-1-40 and 4 階

お申込問合せ　**近鉄文化サロン阿倍野**まで
掲載講座専用フリーダイヤル **0120-106-718**
※携帯・PHS等、一部の種類の電話からはご利用いただけません。

ホームページへのアクセスはこちら
近鉄文化サロン　検索